米国に於けるアクセレレイション問題

宇都宮　巌

一

戦後、占領軍の軍政下に在って、衆知の通り、学制改革が実施され、所謂「大日本帝国」時代に、「八紘一宇」をアジアに呼び掛けていた当時さえも、実行に移し得なかった義務教育の延長や新制四年制大学の増設等、幾多の問題を包含し乍らも、兎も角も一応発足をした。

今年は、之等の新制大学卒業生を初めて社会に送り出すに当り、今更の様に四年制大学の在り方に就いて再検討が試みられ出した。

所謂文化国家として再出発を為すに際し、斯くも多数の四年制大学が設けられる事は、喜びに堪えないが、一方其社会的基盤の問題や受入の問題は、充分に検討されていたかどうか。当時第一軍団に於いて高等教育顧問として、各地の気狂ひじみた「昇格運動」なるものを眺めて、今日の如き事情の発生を私かに案じて居たのであるが、例へ名目丈でも「独立」の「面子」を立てねばならぬ「文部当局」、再軍備の要請に、逆コース論に便乗せんとする徒輩も少くないので、油断してると日本教育の民主化は、民主憲法と同様に、いつの間にか元の木阿弥になりかねない。

他方、敗戦によりて招来されたる一般市民のプロレタリア化は激化の一途を辿るのみで、今日の大学生の生活を想い見る時、少数のブルジョアの子弟を除けば、大部分が所謂アルバイトによるか、昼間勤務し乍ら夜間勉学をするという実情にあるのではあるまいか。

この過労と栄養不足に悩む勤労学生に対し最近夜間部は現在の四年制を五年制に延長しなければならぬという意見が可成り有力なものとなり、其実施は時の問題であるかの如くに云われ出した。

この様な現実に直面し、アクセレレイションの問題を各方面より検討することは、今日の日本に於いて何等かの参考になるのではないかと思い、オハイオ州立大学のS・Lプレッセイ博士の助力者たりしM・Aフレッシヤー博士の御好意により、同大学教育研究所専攻論文集第三十一輯"Educatonal Acceleraton"(1949)の所論を自由に紹介し得る了解を得たので其紹介を試みつつ私見を述べて見度い。米国でも皆無近いアクセレレイション問題の本格的展開は、日本では、殆ど見受けられない様である。然も上述の点から丈でも、昨今の情勢から、かかる研究の発表は必ずや参考になる事と確信する次第である。

二

アクセレレイションの評価と其根本問題を論じる所以は、単に、戦時に於ける要請という目的よりは、寧ろ「戦後に役立つ可能性への理解」を「主たる目的」としている。

日本に於ける戦時中の不用意な機械的なアクセレレイションとは違った、全く科学的に充分調査した資料に基くアクセレレイションの問題を提起し度いのである。

何故ならば、一般的には、アクセレレイションは、不幸な且つ一時的な戦時中の所産であって、出来る丈早く

消滅さすべきものと見られている傾向がある。

アクセレレイションは米国では少くも八十年前に遡り論議された問題である。決して戦時中丈の問題ではない。又其組織的調査も三十年以上も前に初められたのであった。之は決して、一時的な性質のものではなく、アクセレレイションの諸問題には教育政策に関する基本的な且つ又永続的な問題が含まれている。

換言すれば、人類の発達と学問に関する最も根本的諸事実に遡り、又根本的関聯を持っている。一八九〇年に於てすら、既に、教育の期間が長過ぎ社会に巣立つ場合に年を取り過ぎて居ると信じられていた。当時、カレッジの学生は米国に於て十五万人に過ぎなかった。一九四〇年には、大学生の数は実に十倍、即ち、約百五十万に増加して居た。大学院の学生に至っては、この五十年間で、四十倍になっていた。

一九四九年には、大学生の数は更に百万人位増加し、而も、多数の年長者が、既婚者や子持ちの連中が、包含されている。猶、軍隊帰りの之等の者と並んで高校出身の連中も戦後は大学進学者が激増している。

第一軍団に在職中教育課の若いアメリカ兵に、何故兵隊を志願したのか理由を尋ねたら、一年半勤めたら、大学で四年間勉強の便宜が与えられるからと説明して呉れた。この様な連中も相当数に上るものと思われる。

之等の事情を考へると次の二つの問題が焦眉の急と思われる。

㈠　いくつ位迄教育の年限を拡大出来るか？　又いくつ位迄大学に在学を延長出来るか？

㈡　年長者や優秀者は左程でないものとの相違を教育計画とどの様に調整し得るか？

アクセレレイションは「延長されたる学年」(lengthened school year) という様な狭義に考えられる場合が屢〻あるが、他方、余りに広義に解される様にも見受けられる。従来のやり方が自然で望ましく、アクセレレイシ

ョンによるものは、早急過ぎたり、充分に機の熟しないうちに卒業する様に考えられ勝ちである。誤解のない様に、アクセレレイションを定義すれば、「普通よりも早く又若い年齢で、教育計画を通して進歩発達を期す」[1]という訳である。

普通は、米国では、六歳前後に就学し、十二年後に、即ち十八歳頃に大学に入学し、二十二歳位で卒業する。だから、人によっては、四年制大学を三年で完了したら、二十位で卒業するものも出来る訳である。五歳で就学する場合は、四年を三年で終了しないでも当然一年早く卒業出来る訳である。従来の在り方や卒業年齢が妥当なものかどうか、或る種の者には又どの様に変更することがいいか、猶未確定の問題である。

普通よりも短期間で教育計画を完了するには「延長されたる学年」(lengthened school year) の外に——どの様な色々な問題があるか?

斯かる教育計画が学業成績のみでなく健康・社会的調整・卒業後どの様な影響を及ぼすか?

之等の点に関し、教育学や心理学のみならず社会学や生理学の面からも論及して見度い。

要は戦後に於ける高等教育の諸問題に何等かの参考になれば望外の幸せと思う次第である。

戦時中のみならず戦後の教育実践にアクセレレイションが如何に実施され、又今後も何等か稗益する所があるとすれば如何なる点を改善して実施すべきかが本論の第一の考え方である。

第二の考え方は、アクセレレイションの諸問題に就いて教育機関として科学的に悉ゆる方面の資源を活用しつつ周到なる研究を為さんとするのである。

斯かる問題に関する組織的研究は殆んど皆無である。プレッセイ博士の言によれば、「著者の知れる限りでは、

オハイオ州立大学が戦争勃発に際し、アクセレレイションの問題を組織的に調査を進め、且つ調査に鑑みて或程度実践を指導する様にした唯一の機関であった。この研究の明確にして且つ又重要なる点は、斯る研究が為されて居るという事実である。[2]」

日本に於て、斯る研究発表が殆ど無い様に見受けられるが、アメリカ以上に必要なのではなかろうか？　後述する様に決して戦時中の一時的な問題ではなく、況んや誠に無定見な無謀極まる戦時下に於ける日本のアクセレレイション問題の単なる繰返しであってはならない。それ故にこそ、余り一般に論ぜられないアクセレレイション問題が重要であると考えるのである。

前述の二点が明らかにされれば、高等教育の諸問題に対するよりよき理解が可能となる。勿論本論に於いて、何人も容易に気付かれる様に、幾多の不充分なる点があると思うのであるが、上述の二つの考え方の健実さという点は疑う余地は無いと思う。

一九四一年以降の十年間は、アメリカ高等教育に於いては、未曾有の改革と拡張の時期であった。戦前・戦時・戦後を通じ、大規模の大学の機能に関聯している如何なる研究資料も明日の教育計画に何等かの価値を有するに違いない。若しも斯る資料が、大学教育を通じて人間の発達の根本的な関聯性のある重要なものに、証拠を以て関係づけられ、且つ又史的展望のうちに再検討されるならば、一層有益なものとなるであろう。本論は之等の目標に到達せんことを念願としているのである。

① Pressey, S. L. Educational Acceleraton. The Ohio State University. 1949. P. 2.

② Ibid. P. 3.

三

アクセレレイションに於ける幾多の問題は相当古くから論ぜられて来たし又調べられても居た。之等の多くのものは、実に価値あるものであるが、アクセレレイション問題を論ずるに当り、昨今では殆んど省みられない感がある。之等の史的展望を試みることは特に重要である。

大学教育を早く完了する努力

大学教育を早く完了せんとする試みは半世紀以前に遡るし、有名な教育者達によって唱導された。大学入学を早めることと大学の教育計画を短縮することが双方共強調された。

大学入学年齢

全米教育協会（NEA）の一八八八年度の集会に於いてハーヴァードのエリオット総長曰く、「ハーヴァード大学の新入生の平均年齢が過去六十年間に漸増し、今日では十八年十ケ月に達して居る。」時間短縮の要が叫ばれる所以は、「専門家として充分に資格を身につけ一人前として学窓を巣立つと二十七歳になるからである」[1]。結論は、エリオット総長としては、大学入学前の教育を短縮せよと提唱して居るのである。即ち、「小・中・高の教育に於いて復習の時間を減少すれば時間短縮が可能となる。……大人は殆んど正確な知識と記述を有しないのに何故子供達に丈絶えず知識と記述の正確さを要求されねばならないか。……数学や歴史のばらばらの諸事実を正確に覚えて居る大人は殆んどない。又記憶力がよい事が最も大切であるとは限らない事は一般衆知の通りである。[2]」

エリオット総長の後継者たるローウェル総長も一九〇八――一九〇九年の年次報告で大学入学志望者はもっと

若い者程望ましいし、若くて入学する方が有利であると述べている。[3] 一九一三年――一九一四年の年次報告にも、「余り年を取り過ぎて居る者は、真面目な学生であれば、直接的な仕事の準備をしようとしたり、専門の研究に偏る。若しもそうでない者があれば、自分の研究を軽視する傾向がある。成熟に就いて云々されるが年齢よりも環境や責任による方が影響が大きい。成熟といってもうっかりしていると遅過ぎる様になる場合が起り易い。」[4]と報ぜられている。

一九一三年、教育学部のホルムス部長は、一九〇二年――一九一二年に亙るハーヴァード大学生五七六九名に関する研究報告をしている。この報告によれば、最年少の学生達が最上の学業成績を示し、優等で卒業した者が、比較的に多く、又補導上の問題を惹起した者は少数しかなかった。[5]

一九一五年九月のコロンビア大学新入生二八七名に就いて見れば、十五歳の者が最高点を示し、十六歳の者が之に次ぎ、以下年齢の増加する順に逆に低位を示して居た。[6]

其他、ミネソタ大学、ノースウエスタン大学、ペンシルヴァニア大学等等に於ける調査も大体同様の結果を示して居るが、一々枚挙に遑がないから省略する。[7]

最も強硬に年少者の大学入学を反対する議論は一般の学生に較べて社会的並びに情緒的未成熟の為めに社会的不調整が惹起されるのでないかというのである。コロンビア大学の研究によれば、一九二一年から一九二五年に亙る十六歳以下の大学新入生一五四名は、任意に選出したる殆んど同数の他の学生よりも、運動部・文化部・其他の種々なる自治活動に、一層積極的に参加し、其の存在を認められていた。[8]

要するに、大部分の所謂特別進学をなしたる学生達は（Accelerated Students）社会的並びに情緒的調整に、又

は、諸活動への参加に、殆んど苦しまなかった様に見受けられる。

猶参考に、カルフォルニア大学の所謂特別進学をなしたる女子学生達に就いて言及すれば、「普通の女子学生の三割八分が二十五歳乃至それ以前に結婚したのに対し五割九分という数字が出ている。（一九三四年度の校友名籍による）[9]。」

① Eliot. c. w. "Educational Reform". New York: Century Company, 1898. pp. 151. 152.

② Ibid. pp. 165—66.

③ Lowell, A. L. "At War With Academic Tradition in America". Harvard University Press, 1934. p. 245.

④ Ibid. pp. 255—56.

⑤ Holmes, H. W. "Youth and Dean", Harvard Graduate Magazine XXI (June, 1913), pp. 599—610.

⑥ Jones, A. L. "College Standing of Freshmen of Various Ages", School and Society, III (May, 1916). pp. 717—20.

⑦ Pressey, S. L. "Educational Acceleration", The Ohio State University. 1949. pp. 6—8.

⑧ Gray, H. A. "Some Factors in the Undergraduate Careers of Young College Students". (Teachers College, Columbia University, Contribution to Education. No. 4377, 1930. p. 60.

⑨ Keys, N. "The Underage Student in High School and College". University of California Press, 1938. pp. 198—204.

教育計画の短縮乃至改革

ション・ホプキンス大学のギルマン総長は、一八七六年の就任式の演説の中で、「アメリカの伝統的な四年制を維持しようと試みる事は何等の益もない」と述べ、同大学の教育計画の第一次発表に際し、「入学許可後三ケ

年の研究を通常必須とす。」と述べられた。[1]

一八八三年から一九〇九年の隠退迄、ハーヴァード大学では、エリオット総長が、三年制の実施の為に戦ったが不成功に終った。

一八九〇年ハーヴァードの教授会は教育計画の再組織を投票により決めたが、理事会で否決された。一九〇一年学則には「四年・三年半・三年で学位を授与す」と記されていたが、教授会も理事会も三年制に短縮する事には反対した。賛否の論争が展開されていた間に多くの学生が三年間で卒業した。一九〇八年に学位を貰った三七七名中三割六分は三年で要望されたものを全部完了した。[2]

一八五二年、ミシガン大学のタッパン総長はアメリカの大学をドイツ流のものに改革しようとした。一八六九年初期にミネソタ大学のフォルウェル総長も同様の努力を試みた。コーネル大学のホワイト総長は一八九〇年に次の様に記載した。

「……新入学生の年齢を二年早めて初め度い。[3]」

一八九二年に、後にコロンビヤの総長となったN・Mバトラー、一九〇八年にスタンフォードのジョルダン総長等二年でバチェラーの称号を与えよと提唱した。[4]

一九一三年、全米教育協会（NEA）の委員会は、「二二歳を二〇歳で終へる事がいいだろう」[5]と述べた。短縮計画に寄与するものと期待されるものはジェニア、カレッヂ運動、六・四・四制等である。シカゴ大学では「十五歳、十六歳、十七歳、で大学に入学したるものは十八歳、十九歳、二十歳で入学したものと同様にやった。十五歳や十六歳では大学の学課は早過ぎると結論する何等の立証資料もない。[6]」

① Cowley, W. H. "A Ninety-Year-Old Conflict Erupts Again". Educational Record XXIII (April, 1942). pp. 193—94.

② Cowley, W. H. op. cit. pp. 196—98.

③ Cowley, W. H. op. cit. pp. 200—202.

④ Pressey, S. L. "Educational Acceleration". The Ohio State University. 1949. p. 11.

⑤ Cowley, W. H. op. cit. p. 208.

⑥ Koos, L. V. "Integrating High School and College". New York: Harper and Brothers. 1946. p. 85.

四

小・中・高の教育を短縮せんとする試み

小学校は十九世紀に於いて現今の如き学年制になったのであるが、長い年月間に漸時殆んど統一された様な形態に近いものとなったのである。一九一一年には、人口八千以上の六六九都市中、七割三分が八・四制、一割三分が九・四制、七分が七・四制、残りの七分が其他各種である。約三十年前、ソーンダイク、ゴダード、ホイップル、ターマン諸氏が研究の結果、殆んど異口同音に学年制が個人差を無視する点を強調している。又カリキュラムの研究により、小・中・高の教育計画に於ける選定の拙劣さや内容の統合されていない点が指摘されている。アクセレレイションに関し、二つの角度から検討される。即ち、小・中・高の教育計画の年限に関する研究と優秀なる生徒を特別進学させる試みがある。

カリキュラムの統合

カリキュラムを研究する時、重復せるもの、適切ならざるもの、益なきもの、等見出されるが、之等の事実は、

明らかに、年限短縮の可能性を物語るものである。大学入学前の教育に就いて、十二年対十一年の可否論が夫々の立場から、今日猶検討されている。

一八六七年から最近迄、ミズーリ州、カンサス市の小学校は七年制を基にして組織されていた。ソルト・レイキ市も一九二五年に大体同様であった。南部の諸州も殆んど同じである。

大学入学前に、十一年制の高校教育を終えた生徒と十二年制の生徒と比較して、両者の大学入学後の記録を検討して見ると、前者の方が大学卒業迄在学するものが多い事、又卒業の年迄には両者共殆んど学業成績は差違なき事が判明した。

要するに、大学に於ける成績は、十一年の場合でも十二年の場合でも殆んど同じであるとゆう結論が出た訳である。但し大事な相違点は、生徒の学習年限が一年節約出来るという事は、両親にとっては学費が一年分違い、各地の学校の経費が一年分違うのである。シカゴ大学は、各地の実験学校に於ける十一年制計画の適切なることを報じている。②

① Bunker, F. F. "Reorganization of the Public School System" Washington, D. C.: Government Printing Office, 1916. p. 75.

② "The Articulation of the Units of American Education", Department of Superintendence, Seventh Yearbook N. E. A. (1929). pp. 221—26.

優秀なる生徒を特別進学させる試み

優秀なる生徒を特別進学させる試みは色々行われて来た。優等生の特別進級（一学年飛ばす方法）が最も簡単

な最も広く行われている方法である。又マサチューセッツ州、ケンブリッヂで行われた様な、六学年制を五年で完了する方法もある。更にウイネチカで実施された様な固定化された学年制を打破する様な方法もある。約二十年前には、優秀なる生徒はどしどし進級出来る様な妙味のある計画が実施されていた。併し、其後反動が訪れた。最も善通に挙げられる理由は、生徒が其社会的及び情緒的成熟を無視した特別進学から社会的不調整を惹起するという点であった。更に再転して極く最近では、研究の結果、専門家の意見としては、注意深く指導されたる特別進学が望ましいとされる様になって来ている。

ウイネチカでは、学齢に達しない三十六名の児童を、知能年齢及び生活年齢という一般的基準によって、入学せしめたが、年長の児童と比較して、学業成績も、社会性も、遜色なしという事が明らかにされた。[1]

或る小学校で特別進級をした四十六名の生徒は、中学・高校の学業成績に於いて、特別進級しなかった生徒よりも秀れ、大学入学に於いても優り、自治活動への参加も良好であった。[2]

ミズーリ州の或る学校では、優秀なる生徒丈、七学年及び八学年の二年分を一年に短縮して、特別進級させた。この特別進級が高校の学業成績等で苦しい思いをさせたか如何かを調査したら、八割以上が之を否定した。[3]

ウキスコンシンの或中学で、一五〇名の一年生の中最も優秀な三〇名を種々なる角度からのテストにより選出し、二年分を一年でやってのけて、一年生、二年生と二年分を普通にやった一七〇名の中の最も優秀なる二二名と比較し、三年の終りに、標準アチーヴメント・テストを双方に試み、健康も養護婦によって診断された。アチーヴメント・テストの結果は、双者共等しく、「養護婦は特別進級をなしたる生徒の健康が何等の影響も受けて居ないという事を知った。[4]」

① Washburne, Carleton, and Raths, Louis. "Selection of Underage Children for Entrance into School", Educational Administration and Supervision, XIV (March, 1928) pp. 185—89.

② Engle, T. L. "A Study of the Scholastic Achievements in Senior High School of Pupils Who Have Had Double Promotions in Elementary School", Elementary School Journal XXXI (October, 1930), pp. 132—35.

③ Shouse, R. D. "Acceleration of High School Students by Groups". Educational Administration and Supervision XXIII (Jan., 37), pp. 51—62.

④ Unzicker, S. P. "A Study of Acceleration in the Junior High School", School Review, XL (May, 1932), pp. 346—56.

社会的調整に就いて云われていることは、「アクセレレイションのせいにされている色々な危険は（勿論不用意に実施される場合は別であるが）多くは過大評価されき来た」①

一年九ヶ月乃至二年三ヶ月特別進級させられた生徒は皆指導性に於いて普通乃至普通以上であると教師が評価している。

第一表。高校卒業の年齢と其後の学業成績・社会的調整・健康・結婚・職業的成功との関係（「スタンフォード大学優秀学生研究」より）②

	高校卒業の年齢③			
	自一三・六至一五・五	自一五・六至一六・五	一六・六以上	
	テストの結果			
一般的能力 ビネー知能指数	一五八	一五四	一四九	
学業成績	百分比			
大学卒業	八三	七四	六七	

この表は、スタンフォード大学のターマン氏等が、二十五年間に亘り、千四百名の優秀学生を調査した結果である。この優秀学生の多数は特別進学をして居り、

平均良以上	七七	八二	七四
優秀賞	四三	三八	三五
大学院進学	五八	四八	三九
社会的調整			
実習「良好」（一九二八）	八〇	七九	八五
自治活動「優秀」（大学）	二八	三七	三八
綜合「良好」（一九四〇）	七七	八三	八一
健康			
親の評価「良」（二八年）	一〇〇	八九	八五
自己評価「良」（四〇年）	九一	八一	八六
結婚			
男子	七三	六八	七〇
女子	六〇	七四	七一
別居乃至離婚	五	一二	一二
職業的成功			
最高位の男子	四二	二三	一九

	平均年齢		
高校卒業	一四・九	一六・〇	一七・三
大学卒業	一九・九	二〇・九	二一・九
発情期			
男子	一四・二	一四・五	一四・八
女子	一二・七	一二・八	一三・一
結婚			
男子	二四・八	二五・五	二六・一
女子	二二・八	二三・五	二四・一

最年長組も若干名は特別進学をしている。最年長組も三割五分は十七歳以下であった。之等三つのグループを比較して見ても、ビネー知能指数は殆んど大差はない。其の後の記録に於ける三者の相違は之から考えると恐らくは能力差よりはアクセレレイションによるものと思われる。

優秀なる学業成績及び後の職業的成功に鑑み、十九年九ケ月というアクセレレイションによる早期の大学卒業の最年少組に留意されねばならない。しかも、特別進学をなしたる学生の健康は優れている様に見受けられる。「之等の資料によれば、特別進級は心身共に健康に害があると可成広く云われている意見に対して何等の支持をも見出せない。」

社会的調整の三項目に就いては、最年少のグループは稍〻低位である事は事実であるが、其の差は僅かである。

結婚に関しては、特別進学組の百分比は非特別進学

組と殆んど同じであった。（最年少組の女子の低い数字は、この点に関する資料の提供された最年少組に女子が僅か二十五名しか居なかったので問題にならないであろう。）結婚に失敗せる者の数は、特別進学組（就中、最年少組）はずっと僅少であった。

又特別進学組（即、最年少組）の結婚年齢は当然のこと乍ら早期に結婚していて結構である。

最後に、職業的に成功して最高の地位に就いている人々のうち、特別進学組（即、最年少組）が、非特別進学組（即、最年長組）の二倍以上を占めていた。

ターマン氏よりプレッセイ博士へ宛てた書簡の中に、次の様に述べられていた。「スタンフォード大学の優秀学生中、特別進学組（即、最年少組）は、非特別進学組（即、最年長組）よりも、より一層優秀なる記録を示した事は明白です。④」

要するに、過去三十年以上に亘る調査の結果、学業成績のみでなく、健康及び社会的調整に於ても、特別進学組（最年少組）が、殆んどの場合に於いて、一層優秀であるという事が明らかに示された。

① Wilkins, W. L. "The High School Achievement of Accelerated Pupils". School Review, XLIV (April, 1936), pp. 268—73.

② Terman, L. M. and Oden, M. H. "The Gifted Child Grows Up." Stanford University, California: Stanford University Press, 1947. pp. 265—79.

③ 総数一、三九二名、男子七八五名、女子六〇七名。年齢別の各組の人数は左の通り。

自十三年六ケ月至十五年五ケ月	六二名
自十五年六ケ月至十六年五ケ月	三三二名

十六年六ヶ月以上　　九九八名

④ Pressey, S. L. "Educational Acceleration." The Ohio State University. (1949). p. 18.

五

続いて、アメリカに於ける戦時中のアクセレレイションの具体的紹介に移る段階に到達し、其の評価に及び、アメリカに於けるアクセレレイションの歴史的背景の素描を終り度いと意図して筆を起した訳であったが、一応約束された紙数では不充分であり、中途半端なるものとなる恐れがあるので、何れ次の機会に更に詳細に、アメリカに於けるアクセレレイションの根本概念其他具体的諸問題に触れ度い。

日本に於いては、戦後、アクセレレイションの問題が余り論ぜられていない様に思う。反対に、冒題に於いて述べた通り、夜間部の如きは、四年制大学を五年制にと逆に延長されんとする傾向すら顕著である。

アメリカの如き広大なる国土、莫大なる資源等等、恵まれたる国に於いてすら、アクセレレイション問題が、斯くも真剣な態度で、長年月をかけて調査され論ぜられている事実に鑑みて、国土狭少、資源貧困、加うるに人口過多に悩む日本で、出来得れば適当なる手段方法を講じて、(決して戦時中の愚を繰返すことなく)、一日も早く有為の若人達を、一人前に仕上げて社会に送り出し、民主日本、平和日本のバックボーンたらしめ度いと念願する余り、敢えてこの拙い紹介を試み、併せて私見を開陳し、世の示教を乞う所以である。

要は、日本に於いて、もつと日本の特殊事情を考慮し、徒らにアメリカ的理想に幻惑されることなく、日本民族の向うべき方途に就き、採るべきは採り、捨つべきは捨て、斯るアクセレレイション問題等も一層活潑に論議される、スプリング・ボードともなれば幸甚と思う次第である。

――一九五二・一一・一三――